

カシ語の音声と音韻について

峰岸真琴

On Khasi Phonetics and Phonology

MINEGISHI, Makoto

Abstract

This paper presents the Khasi phonetic description and its phonological analysis. The language data, collected during the author's visit to Calcutta in 1991, are of a speaker from Shillong, the capital city of Meghalaya state in Northeast India. The Khasi's population is approximately 650,000 according to the Census of India, 1981.

Khasi words are mainly mono or disyllabic except some loanwords from Hindi or English. Its typical syllable pattern is (CVC) $C_2C_1yV_1C_3$, where existence of only C_1 and V_1 in a major syllable is obligatory. The author argues that Khasi vowels and consonants would be better described if their condition of occurrence as rhymes is taken into consideration. That is, as is the case in many Southeast Asian languages, the distinction between major and minor syllables is significant in that certain vowels can appear only in major syllables which are always the last one in a word, while the others do not.

Many languages in Southeast Asia, regardless of their genetic identity, have this sort of difference. Minor syllables in these languages, as well as Khasi, generally have fewer varieties in rhymes than major syllables do. The most interesting fact in Khasi, however, is that there are some rhymes, like /il/ /ir/ /əm/ /əl/ /ən/ /us/, which do occur only in minor syllables but do not in major ones.

Considering the necessity of distinguishing the minor and major syllables in phonology, Khasi should be treated as a language of Mon-Khmer family in Southeast Asia, though there are evidences which clearly show the influence of the Hindi and other major Indian languages, mainly in its vocabulary.

0. 目的
1. カシ語の背景
2. 主音節と副音節
3. 主音節の母音音素
4. 副音節の母音音素
5. 音節頭子音
6. 末子音
7. 終わりに

0. 目 的

筆者は 1991 年に 2 カ月間、カシ語の基礎語彙調査をカルカットで行った。本稿はその調査結果の報告と、音声、音韻の記述、分析を目的とするものである。特に分析にあたり、主音節と副音節とを区別する事が、カシ語の音節構造の特徴を明らかにするのに有効であることを示す。短期間の調査で語数も約 1400 語と少ないため、試論にすぎないことをお断りしておく。

1. カシ語の背景

1. 1. 分布地域

カシ (Khasi) 語はモン・クメール系の言語とされ、インドの東北部、アッサム地方のメガラヤ (Meghalaya) 州で話されている。メガラヤ州は Khasi, Jaintia, Garo という 3 つの丘陵地帯に分かれているが、カシ語はそのうち、Khasi, Jaintia の 2 つの丘陵で話されている。

カシ語には地域による方言の違いがあり、標準カシ語の他、Lyngam, War, Bhoi, Synteng といった方言に分かれている。また、Synteng 方言は Jaintia 丘陵で話されているので、特に Jaintia 語と呼ばれることもある。メガラヤ州のように山がちな地域にあっては、シロン市内であっても谷間ごとに発音の違いがあるという。

1. 2. カシ語の社会的位置づけ

カシ語はメガラヤ州の公用語ではないが、地域の共通語である。州都シロンでは、カシ

族のみならず、ガロ族、アッサム人や、他の平地から来た人々も、多くはカシ語の話し手でもあり、市内で見かけられる文字もほとんどがカシ語と英語である。この意味で、カシ語は単なる少数民族の間に使用の限定される民族語ではなく、州の共通語としての地位をほぼ確立しているということが出来るが、これはメガラヤが、主としてカシ族、ガロ族の共存する、一州としての独立性を持っていることに起因している。

ヒンディー語、英語などと共に、初等教育などでも用いられる標準カシ語は、カシ丘陵地帯にあるチェラプンジ (Cherapunji) の方言をもとにしている。これはここが英領時代、1864 年以前は英軍の拠点であったため、その後英軍が同じカシ丘陵のシロン (Shillong) に移って以来、インドの独立、さらにはアッサム州からのメガラヤ州の独立に至った現在まで、州都シロンがこの地方の行政、文化の中心となっている。

1. 3. 使用人口

上述のようにカシ語はメガラヤ州の共通語として、これを母語としない人々にも用いられてはいるが、カシ語を母語とする人口は約六十五万人 (Census of India, 1981) である。

1. 4. 系 統

インドでは国内の主要な言語を、インド・アーリア系、ドラヴィダ系、オーストリック系、チベット・ビルマ系の 4 つに分類している。このうち、「オーストリック」は、W. Schmidt の提唱以来、既にインド以外ではあまり用いられなくなった系統分類である。本稿では、より対象の限定された「オーストロ

アジア系」と呼ぶことにする。

オーストロアジア語族はさらにムンダ諸語、ニコバル諸語およびモン・クメール語族の3つに大別される。このうち、ムンダ、ニコバル諸語は、インド国内のみに分布し、モン・クメール語族は、東南アジアを中心として分布している。インドにおいては、カシ語とその方言は、モン・クメール語族に属する唯一の言語であるとされている。

1. 5. 類型的特点

アッサム地方では、インド・アリア系のアッサム語の他に、多くのチベット・ビルマ系の言語が話されている。仮に現在のアッサム地方を、インド主要部とは別の独立した地域として捉え直し、そこで話されている諸言語の多くが共有する地域特徴を考えてみると、次のような傾向が見いだされよう。

1. インド主要部に特有の反舌音が、アッサム語を含めて存在しないこと
2. 単音節、二音節を主とした語彙を持つ言語が多いこと
3. 屈折語であるアッサム語を除くと、語の形態変化が貧弱で、孤立語的傾向をもつこと
4. 声調言語が多いこと

これはインドというよりむしろ東南アジア的である。カシ語についていえば、そり舌音を持たず、単音節、二音節を主とした語彙を持ち、孤立語的ではあるが、声調を持たない。一般に、このような言語の音韻記述には、後述するように、Rhyme に基づいた記述が有効である。

この点で、カシ語の分析に際しては、同系統とされるムンダ語、サンタル語よりも、系統は違いが典型的に似かよった、周辺のチベット・ビルマ系言語を念頭におく必要がある。カシ語と親縁関係にあるとされるとはいえ、膠着語であるムンダ諸語は、むしろ地理的に近いドラヴィダ語との類似性を持っており、カシ語を含めて孤立語的なモン・クメール語

族との間には、かなり大きな隔たりがあるからである。管見では、カシ語の代名詞などにはチベット・ビルマ系の言語の影響が認められるようであるが、残念ながら、チベット・ビルマ系言語に関する知識が筆者にはないので、これらの言語の語彙的な影響については、本稿では触れることができない。

また、借用など、周辺言語との接触による相互の影響を考える場合、カシ語を地理的に取りまくアッサム語、チベット・ビルマ系諸言語の他、近代においてはインド全域にわたって影響を及ぼすヒンディー語、英語についても考慮する必要がある。

本稿の執筆にあたっては、インド諸言語との借用関係について、東京外国語大学助教授の町田和彦氏のご教示を得た。また、特にアッサム語の語彙については、本研究所教授の奈良毅博士の未発表の調査資料を利用させていただいた。ここに記して感謝したい。もちろん本稿に誤りがあるとすれば、全て筆者の責任である。

1. 6. インフォーマント調査

インフォーマントとしてシロン生まれ、カルカッタ在住の Miss Nina Swer (28歳) が協力してくれた。また 1992年1月に、2週間シロンを訪れ、Northeastern Hill University のカシ学科の Dr.M.B. Jyrwa 先生に調査結果のチェックをしていただいた。この機会に二人に感謝の意を表したい。

1. 7. 正書法

カシ語には比較的最近まで文字がなかったが、現代ではローマ字表記が行われ、初等教育の教科書や、新聞雑誌を初めとする日常の出版に用いられている。このローマ字表記は1842年以来、チェラプンジで活動を始めたウェールズの宣教師によって工夫されたもので、母音の長短を、音節末子音の有声、無声の対立に置き換えて示す点など、ウェールズ語の正書法との類似性が指摘されている。カシ語

の表記には *i*, *ī* の2つの補助記号が用いられており、以前は母音記号にアクセント記号が付加されたりしていたが、これは現在では用いられず、印刷の都合からか、*i* も *i* で代用されることが多い。

正書法はカン語の音韻構造をよく考慮したものであるが、若干の問題点がある。まず、*u* の文字の音価が一義的に定まらず、*/u/* または */o:/* を表す可能性があることである。また、語ごとに分かち書きするのが原則であるが、複合語などの場合、空白の区切り方にゆれが存在しており、これが語の認定を困難にしている。というより、話者の内省によっても、複合語の認定が困難であるからゆれが存在する、というべきであろう。

2. 主音節と副音節

カン語は、ほとんどのモン・クメール系の言語と同様、声調を持たない。イントネーションは平叙文では単純な下降型、疑問文では、文末で一旦上昇し、さらに下降するのが一般的である。

カン語の音節構造の記述には、東南アジアで一般的な、主音節、副音節 (major syllable, minor syllable) の区別が有効である。クメール語、タイ語のような東南アジアの言語では、一般に副音節は主音節に比べ、強勢アクセントが置かれず、副音節に現れうる音節の型は、主音節のそれに比べて限定されており、より単純である。後述するように、カン語においても主音節のほうが多くの音節の型を持っているのであるが、副音節にあって主音節にはない音節の型があるのが特徴的である。

カン語の語は、一般に次のような音節構造を持つ。

(副音節) (副音節) 主音節

ここで、副音節はひとつ、あるいはふたつまで許される。この点で、クメール語やタイ語など、固有語において副音節を一つしか許さない言語とは異なっている。

語構成の観点から言えば、一音節語はその音節自体が意味を担っているのは当然であるが、問題は二音節語、三音節語の場合である。即ち、複音節語においては、次のような場合がある。

1. 語としての意味を担う最終音節 (主音節) に、第一、第二音節が前接辞として何らかの意味を付加するもの。

2. 語としての意味を担う最終音節 (主音節) に前接辞が付加されているが、前接辞の意味ははっきりしないもの。

3. 最終音節 (主音節) 単独では独立して意味を担うことができなく、前接辞がついて初めて意味をなすもの。

1, 2, 3の順に音節としての語の独立性が弱まり、複音節語としての性格が強まっているのであるが、2, 3の場合、本来独立した意味を担っていた音節が、歴史的な変化の結果、元来の意味が明確でなくなり、単なる音節として形骸化したのであろうと考えられる。

カン語の音節は次のように表される。

(CVC) (CVC) C₂ C₁ GVC₃

ただし括弧で示される副音節と、子音 C₂, C₃ 介音 G は随意的要素で、主音節中の C₁ V のみが必須要素である。

主音節と副音節を区別する基準について述べておく。カン語において、独立した一語として発音されるもののうち、一音節からなるものは、それを主音節として認める。この原則の例外は否定接辞 */ʔəm/*, */bəm/* の場合で、これは単独の語ではあるが、常に他の打ち消すべき語に前接する、いわば非自由形式である。従って、これらは主音節とはせず、副音節に含めることとする。さらに、2音節以上の語は、最終音節を主音節とし、それ以外を副音節とする。

以上の区別の結果、カン語の音節は、主音節にしか現れないもの、主音節、副音節いずれにも現れるもの、副音節にしか現れないもの

のの三種に分けられる。以下では音韻体系の記述の際に、主音節と副音節を区別して扱うことで、それぞれの特徴を明らかにしたい。

3. 主音節の母音音素

カン語の母音体系の特徴は、母音の開きの広狭だけでなく、一部の母音についてのみ、長短の対立を認めなければならないこと、さらに、その対立がごく限られた音節末子音と共起する場合にだけ存在することである。この意味で、韻母に基づいた記述が有効であるといえる。本節以下で用いる子音は、説明の都合上、簡略表記で表すことにする。

3. 1. 主母音の最小対立例

以下は主音節の母音音素の実際の語における対立関係を、簡略表記で示したものである。ただし、/ɔ/ と /ɔ:/ については、後述するようにに完全な対立例が見いだされなかった。

/i/	[tit]			[kit]
/e:/	[te:t]	[me:t]		
/e/		[mɛt]		
/a/	[tat]	[mat]	[kʰat]	[jaɯ]
/ə/				[jəɯ]
/a:/			[kʰa:t]	
/ʊ/	[pʊt]			[kʊt]
/o:/	[po:t]	[soːʔ]		
/ɔ/		[sɔʔ]	[kʰɔt]	[kɔt]
/ɔ:/				[nɔ:t]

語例

ka poh-tit [pɔʔ tit] 20.1 {armpit}
 tied [te:t] 807 {knock (Vt)}
 tad [tat] 918 {cheap} これは、綴りでは長母音だが実際は短母音である。
 mynta ka miet [mɪn-ta ka me:t] 1066 {tonight}
 ka met [mɛt] 47 {body}
 ka mat [mat] 1625 {joint}
 ba jew [jəɯ] 909 {sour}

u thied u jaw [tʰe:t ʔu jaɯ] 1632 {nerve}
 put [pʊt] 590.1 {blow (v)}
 ka pud /khappud [po:t /kʰap po:t] 733 {border /frontier}
 suh [soːʔ] 353 {sew (Vt)}
 u soh [sɔʔ] 126 {fruit /nut}
 khat [kʰat] 346.1 {serve (rice)}
 khad wei [kʰa:t weɪ] 667 {eleven}
 khot[kʰɔt] 281 {call (Vt)}
 kit [kit] 830 {bear on one's back (Vt)}
 kut [kʊt] 869 {finish (Vi)}
 ka kot [kɔt] 599 {book}
 nod [nɔ:t] 660 {zero}

3. 2. 主音節母音の出現環境

以下に、カン語の主音節に現れる母音音素と、その音声の特徴について述べる。ただし、個々の子音の音価については、子音音素の記述の際、必要に応じて述べることとし、音韻的音節の切れ目を、便宜的に音声表記の中にハイフンで示すことにする。

また以下では、ある音の出現例が少ない場合、特に出現が借用語に限られる場合、その具体例を挙げて言及する。

3. 2. 1. 前舌母音 /i/ /e:/ /ɛ/

/i/ が [i] または [i:] として出現する環境を次に示す。

[i: iʔ iɯ]

/i/ は長短の対立を持たないが、環境による異音としては、長短がある。即ち、閉音節では音声的に短い、開音節では長い [i:] になる。また、二重母音 [iɯ] は、音韻的には /iw/ と解釈されるが、これは以下の1例のみである。(以下の例では、カン語の綴り字、それに対応する発音表記に続いて、AA研の言語調査表における番号と語義とを付加してある。)

sma iw khong [sma ʔiɯ kʰɔŋ] 910 stinking/smelling

一方、/i/ は以下の環境において [i] とし

て出現する。

[ɪp it ik ɪm in ɪŋ ɪs]

[ɪs] が現れるのは以下の 3 例である。

ka aphis [ʔa-pʰɪs] 1237 office

ka histori [hɪs-tɔ-ri:] 1296 history

ka peris [pɛ-rɪs] 553.1 saucer

前二者は英語からの借用語であり、最後の例も、主音節末子音の項で述べるように、借用の可能性がある。従って、[ɪs] の出現はごく希であるといえる。

/e:/ は以下の環境に出現する。

[e: ɛt ɛ:c eʔ ɛ:m ɛ:n ɛ:ŋ ɛ:r ɛ:ɹ]

[e:] は音声的には狭母音であるが、口の開きが狭いだけでなく、後舌が高まり、緊張することに特徴がある母音である。また、声門閉鎖音の前では半長になる。

[ɛ:r] は以下の 1 例のみであるが、固有語であると思われる。

ki snier [sne:r] 37 guts

[ɛ:ɹ] は /e:w/ と解釈する。

/e/ は以下の環境に出現する。

[ɛ: ɛp ɛt ɛc ɛk ɛʔ ɛm ɛn ɛŋ ɛr (ɛl) ɛj]

ただし、丸括弧でくくった要素は借用語にしか現れないことを示す。

[ɛk] は以下の 2 例のみで、後者は英語からの借用語である。

u prek [prek] 1380 nail

ka kek [kɛk] 524 cake N.B. (Eng) cake

[ɛl] は次の英語からの借用語に現れるのみである。

ka rel [rel] 1498 train

また、二重母音[eɪ] は /ey/ と解釈する。

以上のように、[e:] および[eɪ] は、共に、開音節あるいは /t, c, ʔ, m, n, ŋ/ の前で対立する。従って、別の音素である。

3. 2. 2. 中舌母音 /ə/ /a/ /a: /

/ə/ は主音節においては、原則的に[əɹ] (/əw/ と解釈する) としてしか現れない。従って、これは他の音節、例えば */ew/ あるいは */ow/ などから音声的に変化したの

かもしれない。また、/ə/ は例外的に否定接辞の /ʔəm/, /bəm/ にも出現するが、これは先に述べたように、動詞の意味を打ち消すため、常に動詞の前に置かれるという点で、いわば非自由形式であり、副音節の例と見なすことにする。

この他に、以下の英語からの借用語にも用いられるが、これは明らかに最近の借用である。

ka proberb [prɔ-bəb] 1288 proverb /saying

/a/ と /a:/ には長短の対立がある。

まず、/a/ は次の環境に出現する。

[ap at ac ak aʔ am an aŋ aŋ (al) ar aɹ aɪ]

[aɹ] [aɪ] はそれぞれ /aw/ /ay/ と解釈する。

[al] は以下の借用語の例 1 例のみであった。

ka aspatal [ʔas-pa-tal] 1244 hospital

N.B. (A) hāspātāl (H < Portugese) aspatāl

一方 /a:/ は次の環境に出現する。

[a: a:p a:t a:c a:m a:n a:ŋ]

以上のように、/a/ と /a:/ は、共に /p t c m n ŋ/ の前で対立するので、異なる音素である。

3. 2. 3. 後舌母音 /u/ /o:/ /ɔ/ /ɔ:/

/u/ は主音節では以下の借用を含む 3 例の開音節にのみ現れ、[u:] として実現する。

ka khadu [kʰa-du:] 566 bangle /bracelet

u [ʔu:] 229 he (3rd per. sg.)

ka jadu [ja-du:] 1316 magic N.B. (H < Per.) jādū

一方 [u] は開音節には現れない。

[ʊp ʊt ʊc ʊk ʊʔ ʊm ʊn ʊŋ ʊŋ ʊr (ʊl)]

ただし、[ʊl] は英語からの借用語のみに現れる。

u 'sai wul [saj wʊl] 1391 wool

ka skul [skʊl] 728 school

以上のことから、[u] と [ʊ] は相補分布をなすので、共に /u/ の環境による異音とみなすことができる。

/o:/ は以下のような環境に現れる。

[o: o:t o:c oʔ o:m o:n o:ŋ o:r]

まず、/o:/ は次の例のように開音節に現れるので、/u/ とは対立する。

kumno [kUm-no:] 256 {how}

[o:p] は次の 1 例のみであった。

luin̄ [lo:p] 450 blunt /dull

また、[o:r] は次の 2 例のみであった。

u 'nai lur [naɪ lo:r] 635 September

u khlur [kʰlo:r] 162 star

/ɔ/ と /ɔ:/

/ɔ/ と /ɔ:/ は、それぞれ次のような環境に出現する。

[ɔp ɔt ɔk ɔʔ ɔm ɔn (ɔl) ɔr ɔj]

[ɔ: ɔ:t ɔ:c]

ただし、[ɔ:t] [ɔ:c] は、それぞれ次の一例が見つかっただけである。

nod [nɔ:t] 666 zero

ka jakoid [ja-kɔ:c] 1596 frog

また、[ɔj] は /ɔy/ と解釈する。

[ɔ] は、次の 1 例のみであるが、一般にカン語で 2 つの音節が発音上の一単位をなす場合で、前の音節が開音節の時、その母音が音声的にやや短く発音されることを考慮して、/ɔ:/ の実現形の一つとした。

例

ho oid [hɔʔɔ:c] 492 yes

また、[ɔl] は英語からの次の借用語にのみ現れる。

ka bol [bɔl] 1481 ball

ka petrol [pɛt-rɔl] 1370 petroleum

/ɔ/ と /ɔ:/ は、/t/ の前でのみ、対立があるが、語例が少なく、ここに最小対立例を挙げることができない。ただし、次の例では、インフォーマントにははっきり長さの違いが意識されていた。

ka kot [kɔt] 599 book

nod [nɔ:t] 666 zero

3. 3. 主音節の母音のまとめ

以上に述べてきた結果を仮にまとめると、語の必須要素である主音節の母音体系は、次のような体系を示す。

/i/		/u/
/e:/	/ə/	/o:/
/ɛ/	/a, a:/	/ɔ, ɔ:/

4. 副音節の母音音素

副音節には強さアクセントがなく、母音の長短の対立もない。副音節には以下の音声的に短い母音が現れうる。

[i, ɛ, ə, a, u, ɔ]

つまり、[e: a: o: ɔ:] は副音節には出現しない。

4. 1. 副音節母音の出現環境

一部の音素は、主音節と副音節とでは、それぞれ違う音韻的環境に現れうる。具体的には、母音によっては、主音節では取りえなかった音節末音を副音節において取ることがあり、またその逆の場合もある。

4. 1. 1. 前舌母音 /i/ /ɛ/

母音 /i/ を含む韻母のうち、次に挙げるものが二音節あるいは三音節語の副音節として現れうる。ただし、副音節にしか現れない音節は僅かである。

/*i *im *in *ij ir il (is)/

ここで、*印を付したものは主音節にも現れうる韻母である。つまり、副音節にしか現れない韻母は /il/ ([il]) および /ir/ ([ir]) の二つである。

以下に韻母 /il/ /ir/ を含む副音節 CVC- の例を挙げる。

/il/ [pɪl-, pʰɪl-, jɪl-, kɪl-, kʰɪl-, tɪl-, tʰɪl-, ʃɪl-]

/ir/ [pɪr-, pʰɪr-, bɪr-, mɪr-, tɪr-, tʰɪr-, jɪr-, kɪr-, kʰɪr-, sɪr-]

以下に主音節と副音節の、両方に現れる韻母を含む音節を示す。*印を付したものは当

該音節が主音節にも現れるものだが、それ以外は副音節にしか見いだされていない。

/i/ [pi-, *pʰi-, bi-, mi-, *ti-, *ki-, *ʔi-, *ri-, *li-, *fi-, hi-]

/im/ [*tʰim-, tʰim-, jum-, *rim-, lim-, *sim-, *ʃim-]

/in/ [*pin-, *bin-, min-, kun-, jun-, kʰin-, sin-, ʃin-, hin-, lin-, rin-]

/iŋ/ [tuŋ-, juŋ-, nuŋ-, ruŋ-, luŋ-, suŋ]

ただし, [suŋ] そのものは副音節にしか現れないが, 以下のような主音節の例がある。

[ksuŋ] 588 {drum}

/is-/ は次の借用語一語のみに現れる。

histori [his-tʰ-ri:] 1296 history

母音 /e/ を含む韻母のうち, 次に挙げるものが二音節あるいは三音節語の副音節として現れうる。ただし, /e/ は, 副音節ではほとんどの場合, 借用語にしか現れない。

/*e (*et) (*ek) (*es)/

副音節のみに現れる韻母としては, 借用語の /es/ が一例のみであった。

/es/ [pʰres-]

[pʰres-bin] 530 {beans} N.B. (Eng) fresh bean

この他の主音節にも副音節にも現れる韻母 /e et ek/ も僅かな語例のみであり, そのほとんどが借用語である。

/e-/ [pe-, (te-,) (?e-)] (一例を除き, 借用語)

[pe-la] 554 {cup} N.B. (A) piyalā (H) pyālā

[pe-ris] 553.1 {saucer}

[ʔer ba-te-mən] 152.1 {breeze} N.B. <lyer

[ʔe-lek-trikʰ] 1517 {electricity} N.B. (Eng) electric

/et/ [(pet-,) (ket-)]

[et] は英語からの借用語の2例に現れる。

[ket-li:] 105 kettle N.B. (A) ketli (H) ketli <(Eng) kettle

[pet-rəl] 1370 {petroleum} N.B. (Eng) petrol /ek/ [(lek-)]

[ek] は英語からの借用語の1例のみである。
[ʔe-lek-trik] 1517 electricity N.B. (Eng) electric

4. 1. 2. 中舌母音 /ə/ /a/

/ə/ は主音節でのべた例外的な /əw/ の場合を除いて, 副音節で現れる母音であるが, 語例は少ない。/ə/ は以下の環境で出現する。

/əm əl- ən-/

[əm] は以下の例のみに現れる。

[bəm deɟ] 486 not correct

[bəm naŋ krɛn] 221 dumb

[ʔəm] 500 not

また, [əl] [ən] は, それぞれ以下の一例のみである。

i khyllung /khunlung [kʰəl-luŋ /kʰən-luŋ] 697

baby

これらは主音節には現れないことに注意を要する。

母音 /a/ を含む韻母のうち, 次に挙げるものが二音節あるいは三音節語の副音節として現れうる。ただし, 副音節にしか現れない音節は /as/ のみであり, それも借用語である。

/a/ は第一音節では以下のような環境に現れうる。

/*a *at *ak *am *an *aŋ *aŋ *ar *al (as)/

/a-/ [*pa-, pʰa-, *ba-, *ma-, *ta-, *da-, *na-, *ja-, *ka-, *kʰa-, ʔa-, *ra-, *la-, *sa-, *ʃa-, *ha-, *ya-]

/at/ [(ʔat-), (pat-), (ʃat-)]

/at/ は以下のヒンディー語からの借用語のみに現れる。

[ʔat-ta] 522 {flour} N.B. (H) āṭā

[pat-luŋ] 569 {trousers} N.B. (H <Portugese) patlūn

[ʃat-ri:] 564 {umbrella} N.B. (H) cʰatrī

/ak/ [bak-, (ʃak-)]

[ak] は, 固有語と思われる2例と, アッサ

ム語あるいはヒンディー語からの借用語 2 例に現れる。

[bak-la] 864 make a mistake (Vi)

[juŋ-bak-la] 1264 mistake /fault /error /wrong

[ʃak-ri:] 1217 servant (A) sākar (B) cākar- (H) cākar

/am/ [*kam-, *sam-]

/an/ [*jan-, (*k^han-,) *wan]

/an/ は以下の借用語の 1 例のみであった。

[k^han-fi:] 557 scissors N.B. (A) keśi (H) kāñcī

/aŋ/ [(^{*}paŋ)]

/aŋ/ も借用語の 1 例のみであった。

[paŋ-k^ha-na] 576.1 {toilet stool} N.B.

(H<Per) pāk^hānā

/aŋ/ [haŋ]

[aŋ] は以下の 3 例であった。

[haŋ-ne] 257 here

[haŋ-tej] 259 that place /over there

[haŋ-to:] 258 there

/ar/ [(^{*}bar-)]

[bar-li:] 531 {barley /wheat /oats /rye} N.B.

(Eng) barley

/al/ [(hal-,) (?al-)]

/al/ は以下の借用語の 2 例のみであった。

iam /halla [yaɪm /hal-la] 282 cry /shout (Vi)

N.B. hallā (H) fuss, noise

ka almari [ʔal-ma-ri:] 1419 shelf

後者はポルトガル語からの借用例である。

/as/ は借用語の 1 例のみである。

ka aspatal [ʔas-pa-tal] 1244 hospital N.B. (A)

hāspātāl (H<Portugese) aspatāl

4. 1. 3. 後舌母音 /u/ /ɔ/

母音 /u/ を含む韻母のうち、次に挙げるものが二音節あるいは三音節語の副音節として現れうる。

/*u *um *uk us/

副音節にしか現れない /us/ は以下の 3 例のみで、うち 2 例は借用語である。

khuslai [k^hus-la] 776 be worried (V)

ka musla [mus-la] 523.2 seasoning, spice N.B.

(H<Arabic) masālā

ka dustur [dus-tūr] 1259 habit /custom N.B.

(Urdu) dastūr (<Persian)

次の韻母 /u um uk/ が副音節にも主音節にも現れる。

/u/ [pu-, bu-, mu-, tu-, *du-, ju-, ku-, k^hu-, *ʔu-, ru-, su-, fu-, hu-]

/um/ [*kum-]

[uk] は次の一例のみである。

[puk-ri:] 115 well

母音 /ɔ/ を含む韻母のうち、次に挙げるものが二音節あるいは三音節語の副音節として現れうる。

/ɔ/ (*ɔp (*ɔm) *ɔt (*ɔk) *ɔr (ɔs) (*ɔy)/

このうち /ɔ/ /ɔs/ は副音節にしか現れない。

/ɔr/ [(prɔ-,) (tɔ-,) (kɔ-)]

音節末音なしの [ɔ-] は、以下の借用語にのみ現れる。

[prɔ-bəb] 1288 proverb /saying N.B. (Eng) proverb

[his-tɔ-ri:] 1296 history N.B. (Eng) History

[kɔ-p^hi:] 1409 coffee N.B. (A) kap^hi (H) kāfi

/ɔs/ [(tɔs-)]

[ɔs] は以下の 1 例のみで、借用語である。

[ʔa-tɔs-k^ha-na] 1418 {chimney} N.B.

(<Bengali) atɔʃk^hana a cooking stove, (H)

ātişxāna (Per) ātaşxāna

/ɔp/ [sɔp-]

[ɔp] は次の 1 例のみである。

[sɔp-ti:] 1397 coat /jacket

/ɔm/ [(mɔm-)]

[mɔm-] も借用語のみに現れる。

[mɔm-ba-ti:] 1372 wax N.B. (A) mambati-

(H) mombattī

/ɔt/ [sɔt]

[ɔt] も次の 1 例のみである。

[sɔt-ti:] 1164 virgin

/ɔk/ [(dɔk)] は英語からの借用語 1 例のみである。

[dɔk-tɔr] 717 doctor N.B. (A) dāktar (H)

dāktar

/ɔr/ [*bɔr-, *sɔr-]

これらは共に主音節にも現れる。

/ɔy/ [(sɔj-)] は借用語の 1 例のみである。

[sɔj-tan] 1157 devil /Satan N.B. (A) saytān
(H<Persian) sətān

4. 2. 母音のまとめ

主音節と副音節における各母音音素の出現環境をまとめると、以下のようになる。丸括弧でくくったものは借用語にしか現れない韻母，*印は主音節と副音節に共通して現れる韻母である。

/i/

主音節 /i: ip it ik iʔ im in iŋ (is) iw/

副音節 /*i *im *in *iŋ ir il (is)/

/e:/

主音節 /e: eɪ eɪc e:ʔ eɪm eɪn e:ŋ eɪr e:ʷ/

副音節 なし

/ɛ/

主音節 /ɛ eɪp eɪt eɪc eɪk e:ʔ eɪm eɪn e:ŋ eɪr (eɪ) eɪy/

副音節 /*ɛ (*eɪt) (*eɪk) (*eɪs)/

/ə/

主音節 /əw (əb)/

副音節 /əɪm əɪl əɪn/

/a/

主音節 /ap at ac ak aʔ am an aŋ aŋ ar (aɪ) aw ay/

副音節 /*a *at *ak *am *an *aŋ *aŋ *ar *al (as)/

/a:/

主音節 /a: a:p a:t a:c a:m a:n a:ŋ/

副音節 なし

/u/

主音節 /u up ut uc uk uʔ um un uŋ uŋ ur (uɪ)/

副音節 /*u *um *uk us/

/o:/

主音節 /o: o:t o:c o:ʔ o:m o:n o:ŋ o:r/

副音節 なし

/ɔ/

主音節 /ɔp ɔt ɔk ɔʔ ɔm ɔn (ɔɪ) ɔr ɔy/

副音節 /(ɔ) *ɔp (*ɔm) *ɔt (*ɔk) *ɔr (ɔs)

(*ɔy)/

/ɔ:/

主音節 /ɔ: ɔ:t ɔ:c/

副音節 なし

このように、一般に主音節の韻母の種類の方が、副音節よりも豊富であるが、/iɪ/ /i:r/ /əɪm/ /əɪl/ /əɪn/ /us/ は副音節にしか現れないことに注意すべきである。

5. 音節頭子音

以下では音節頭子音それぞれの出現環境を、主音節、副音節に分けて示す。

5. 1. 主音節の頭子音

次に示すような子音音素がある。これらは全て、主音節の頭子音として現れうる。

無声無気音	/p	t	k ʔ/
無声帯気音	/p ^h	t ^h	k ^h /
有声無気音	/b	d	j/
有声帯気音	/b ^h		j ^h /
鼻音	/m	n	ɲ ŋ/
流音		/r l/	
摩擦音		/s f	h/
半母音	/w y/		

ただし、帯気音は単独の音素として認める。これは、カシ語においては帯気音を無気音と/h/の連続と見なすべき積極的な根拠がないことと、それによって、子音連続の音節構造の記述が簡潔になることによる。また、流音/r/は巻舌音である。

5. 2. 主音節頭子音の最小対立例

以下に実際の語における対立例を示す。

/p/		[par]
/t/	[tap] [tat] [tar]	[tɔr]
/k/	[ka]	[kɔr]
/ʔ/		[ʔar]
/p ^h /	[p ^h aj]	

/tʰ/	[tʰap]	[tap] 1825 {put on /cover (Vt)}
/kʰ/		[kʰɔ̃r] [tʰap] 401.1 {wait to catch}
/b/	[ba]	[bar] [bɔ̃r] [dap] 470 {full}
/d/	[daj] [dap]	[dɔ̃r] [ŋap] 1602 {bee /honeybee}
/j/	[ja] [jai]	[jar-jar] [lap] 392 {find}
/bʰ/	[bʰa]	[hap] 792 {drop (Vt)}
/jʰ/	[juŋ-jʰa]	[yap /juŋ-yap] 397 {die (Vi)}
/m/	[ma] [maj]	[mat] [tat] 918 {cheap}
/n/	[naj]	[nar] [mat] 1625 {joint}
/ɲ/	[ɲa]	[ɲat] [ɲat] 308 {push (vt)}
/ŋ/	[ŋa]	[ŋap] [sat] 444 {hot /pungent}
/r/	[raj]	[wat] 769 {DO NOT (Negative Imperative)}
/l/	[laj] [lap]	[lɔ̃r] [par] 323 {crawl /creep (Vi)}
/s/	[saj]	[sat] [sar] [sɔ̃r] [tar] 341 {tear (Vt)}
/f/	[fa] [faj]	[ʔar] 180 {two}
/h/	[ha]	[hap] [bar] 1093 {outside}
/w/	[waj]	[wat] [jar-jar] 925 {quiet}
/y/	[yai] [yap]	[yar] [yɔ̃r] [nar] 584 {iron}
		[sar] 1878 {sweep (Vt)}
		[yar] 459 {broad /wide}

語例

[ka] 230 {she (3rd per. sg.)}	[tɔ̃r] 505 {lung}
[ba] {infinitive marker}	[kɔ̃r] 585 {machine}
[ja] 518 {cooked rice}	[kʰɔ̃r] 1965 {violent}
[bʰa] 485 {good}	[bɔ̃r] 220 {force /strength /power /might}
[juŋ-jʰa] 48 {diseases /illness /sickness}	[dɔ̃r] 598 {price /cost}
[ma] 927 {dangerous}	[lɔ̃r] 745 {surface}
[ɲa] 205.4 {aunt}	[sɔ̃r] 248 {town}
[ŋa] 227 {I (1st per. sg.)}	[yɔ̃r] 156 {snow}

子音体系の特徴として、閉鎖音の系列の不均衡が目につく。

第一に無声閉鎖音の /c, cʰ/ が欠落している一方で、対応する有声音の /j jʰ/ がある。また、/k/ はあるが、/g/ は存在しない。

第二に、有声帯気音は /bʰ jʰ/ のみで、/gʰ/ は存在しない。さらに、/bʰ/ は借用語と見られる 1 例のみ、/jʰ/ は固有語かどうかは不明の 2 例のみである。

[faj] 474 {bright /light}	bha [bʰa] 485 {good} N.B. (A) bʰāl (IA)
[waj] 1858 {adopt /employ (Vt)}	bʰā (H) bʰā-nā {to fit} bʰālā
[yai faʔ] 1792 {endure (Vi)}	juhr [jʰur] 529 {vegetable}

jhieh [j^he·ʔ] 388 {get wet /damp (Vi)}

従って、有声帯気音は、存在するとはいえ、極めて周辺のなものにしか過ぎないといえる。

5. 3. 副音節の頭子音

調査した語例が少ないため、以下に挙げる音素の他に、いかなる子音も現れないと明言はできないが、調査結果のみに従えば、副音節には有声帯気音および鼻音の η η が現れない。

/p t k ʔ/
 /p^h t^h k^h/
 /b d j/
 /m n/
 /r l/
 /s ʃ h/
 /w y/

5. 4. 主音節の頭子音連続

以下に見るように、カン語の主音節の初頭には、多様な組み合わせの子音連続が可能であり、これがモン・クメール系の言語であることの一つの論拠とされている。

帯気音をそれぞれ単独の音素として認めると、主音節の頭子音には、介音を含めて、最大3つまでの連続が許される、と言うことができる。ただし、3つの連続がある場合には、3つめは必ず介音 /y/ である。

/p^ʔ pd pj pr pry pl ply py/
 /td tm tn tr tl ty/
 /kp kt kt^h kb kd kj km kn kɲ kr kl ks ksy kf kw ky/
 /p^hɲ p^hr p^hry p^hl/
 /t^hm t^hn t^hɲ t^hr t^hl t^hy /
 /k^hm k^hn k^hɲ k^hr k^hl k^hly k^hw k^hy/
 /bn bɲ br bl bs by/
 /dp dk dk^h dɲ dw dy/
 /jɲ jr jl jy/
 /mr ml my/
 /ɲy/

/rk^h rk^hy rɲ rw ry/

/l^ʔ lb ly/

/sp st sk s^ʔ s^ʔy sd sm sn sɲ sl sly sw sy/

/ʃk ʃ^ʔ ʃn ʃɲ ʃr ʃl/

/hy/

/wy/

カン語の特徴として、C₂, C₁のうちC₂がしばしば複合語で脱落する。

以下に例を掲げる。

ka shyn-riah-'ti [ʃɲn-rya^ʔ ti:] 31 {finger} 指

/ti/ < /kti/ 手

ka 'ti kdew [ti: kdəw] 1627 {forefinger} 人差し指 (同上)

u 'sai tyllai [say til-laj] 1387 {cord /straw rope} 縄

/say/ < /ksay/ 糸

u 'nai lar [nay lar] 634 {August} 八月

/nay/ < /bnay/ 月

ka 'riew kynthei [re:w kin-t^heɪ] 1170 {widow} 未亡人

/re:w/ < /bre:w/ 人間

ka 'er iəng [ʔ^{er} yəŋ] 1532 {storm /tempest} 嵐, 暴風

/ʔ^{er}/ < /l^ʔer/ 風

ka poh 'jat /khongdong-'jat [p^ʔ jat /k^hɔŋ dɔŋ jat] 1623 {heel} 踵

/jat/ < /kjat/ 足

u 'niuh moh [ɲo^ʔ mɔ^ʔ] 1639 {beard} 鬚

/ɲo^ʔ/ < /ʃɲo^ʔ/ 髪

さらに、二音節語では最初の副音節が脱落することもある。

u 'rangbah [raŋ ba^ʔ] 1223 {head /chief} 長, 頭, 首領

/raŋ/ < /ʃɲn-raŋ/ 男

ka 'dew bilat [dəw bi:-lat] 1363 {cement} セメント

/dəw/ < /kin-dəw/ 土

従って、これらは単なる音韻上の子音の脱落でなく、形態論上の問題であるといえる。

5. 5. 副音節の頭子音連続

副音節の頭子音には、原則として子音連続が許されない。例外は /p^hr/ と /pr/ の2例で、いずれも英語からの借用語である。

- /p^hr/
- ki phresbin [p^hrɛs-bɪn] 530 beans N.B. (?Eng)
- fresh bean
- /pr/
- ka proberb [prɔ-bəb] 1288 proverb /saying

6. 末子音

6. 1. 主音節の末子音

- /p t c k ?/
- /m n ɲ ŋ/
- /r (l)/
- /w y/
- /s/
- /(b)/

ただし、/s/ は借用語以外では次の1例のみであるが、これも借用である可能性もある。

- ka peris [pɛ-rɪs] 253.1 saucer
- その理由として、末子音に /s/ を持つ借用語の中には、/s/ を /t/ に変えて借用した、以下のような例があり、このことは、本来のカン語が、末子音に /s/ を取らなかったことを示唆していると考えられる。そうだとすれば、上記の例は、より最近の借用語において、例外的に /s/ が許されたものと考えられよう。
- u pulit [pu-lɪt] 1215 {policeman /constable} 警官, 巡査 21-343.99 N.B. (A) pulis (H) pulis <(Eng) police
- [klatʰ] 551 {glass} N.B. (A) gilās <(Eng) glass
- 先に述べたように、/b/ は英語からの借用語1例のみであった。
- ka proberb [prɔ-bəb] 1288 proverb /saying

/l/ は英語からの借用語6例のみだが、母音の節で既に挙げたので、改めては掲げない。

主音節末の閉鎖音 /ptck/ は、音声的にはそれぞれ内破音 [p^ht^hɪt^hk] として実現する。

中でも [t^h] は歯音 [t] にわたり音 [i] が先行するもので、対応する音節頭音 /c/ が存在しないことと併せて見ても、極めて興味深い。この音節頭音、末音の非対称性は、音節末 /c/ が、比較的最近に成立したことを示唆するものかもしれない。

例えば、以下の例が仮にヒンディー語からの借用語であれば、ヒンディー語からカン語に入る際に、第二音節の /i/ が先行音節の音節末音 /t/ の調音位置に影響し、*/ati/ > /ac/ という史的变化を遂げた結果、現在のような音節頭音と末音との非対称性を持つに至ったとも、少なくとも一つの可能性としては考えられよう。

- ka jait [jaɪt] 1009 {class} 階級 8-160.99 N.B. (H) jāti

6. 2. 副音節の末子音

- /p t k/
- /m n (ɲ) ŋ/
- /r l/
- /s/
- /w y/

/ɲ/ は副音節母音の項目で述べたように、次の借用語の1例のみに用いられる。

- ka paiñkhana [paɲ-k^ha-na] 576.1 toilet stool (H<Per) pāk^hānā)

また、/s/ はほとんどが借用語である。

ここで注目すべきことは、主音節の末子音としては借用語以外にほとんど現れない /l/ が、副音節では、/hal-, jil-, k^hal-, k^hil-, kil-, p^hil-, pil-, t^hil-, til-, ?al-, fil-/ という接辞として、頻繁に現れることである。

7. 終わりに

カン語の音韻に関しては、主音節、副音節を区別した上で、各音素の韻母としての型を調べることが、有効な分析方法となりうる。それによって、主音節、副音節にそれぞれ固有の音節の型を見いだすことが出来た。これ

に類似する現象は、東南アジアの諸言語に広く見いだされるが、カシ語の場合、少数とはいえ、主音節では許されない音節の型が、副音節において、前接辞として現れ得るのが大きな特徴であるといえることができる。

今後より多くの語例について、同様の分析を行うことにより、カシ語の本来の音節の型と、主として英語、ヒンディー語からの借用による、音節の型の増加といった史的变化を辿ることができると考えられる。

参 考 文 献

- Gurdon, P.R.T., "The Khasis", 227pp. Reprinted in 1990, Delhi.
Henderson, E.J.A., "Vowel length and vowel quality in Khasi", BSOAS XXX, pp. 564-588, 1967.
——— "Problems and Pitfalls in the Phonetic Interpretation of Khasi Orthography", *Austroasiatic Languages* (Essays in honour of H.L.Shorto), pp. 61-66, 1991, London.
Rabel, L. "Khasi, A Language of Assam", 249pp. 1961, Baton Rouge.